

| | |
|-------------|-----------|
| 群 教 セ | F09 - 01 |
| | 平 17.225集 |

不登校児の学校復帰を促す適応指導教室と 学校との連携した支援の在り方

－ 適応指導教室での不登校児に対する支援の参与観察を通して －

長期研修員 泉 あけみ

（研究の概要）

不登校児の学校復帰を促すには、教育支援センター（適応指導教室）と学校との連携した支援が重要である。しかし重要だと分かっているにもかかわらず、十分な連携をすることは難しい実態がある。本研究は、県総合教育センターの適応指導教室での不登校児への支援の参与観察を通して、「不登校児への働きかけ」、「情報連携の意義」、「効率的な情報連携の在り方」を分析した。そして、適応指導教室と学校が連携していくために必要な手だてを提言する。

キーワード 【教育相談 適応指導教室 連携 情報の共有 学校復帰】

主題設定の理由

様々な背景から不登校状態になっている児童生徒が、適応指導教室に通ってきている。彼らは、社会復帰へと向かって一歩踏み出した状態であると考えられる。しかし、友達の目が気になったり、うまく人間関係をつくっていく自信がないなど、様々な不安や緊張感を抱えていたりする。また、学校へ行く意義を見いだせない児童生徒もいる。そんな彼らに、社会生活に適應していく意志と自信をもたせ、社会的自立を支援するには、まず、原籍校である学校に復帰することを第1目標に支援していくことが重要であると考えられる。

適応指導教室では、不登校児の自己実現を図りながら、社会的自立を目指し支援をしている。しかし、適応指導教室で、仲間との生活に適應できるようになっても、なかなか学校復帰に踏み出せない。学校復帰へ踏み出すには、どうしても学校からの支援が必要である。

つまり、不登校児に対しては、適応指導教室でなければできない支援と、学校でなければできない支援があり、それらは相互補完関係にあると考えられる。そして、それぞれの支援をバランス良く有効に機能させていくことで、不登校児への支援に相乗効果がもたらされると考える。

適応指導教室と学校との不登校児への支援が、相乗効果をあげるためには、情報を共有し合い、連携していくことが重要である。しかし、重要だと分かっているにもかかわらず、情報交換をする時間や機会を

つくり、十分な連携をしていくことは、実際には難しい。

今回、群馬県総合教育センターの適応指導教室で、不登校児に対する支援の参与観察をする機会を得た。そこで、不登校児に学校復帰への意志をはぐくむための支援の在り方を探る。また、適応指導教室と学校とが、どのように情報連携し、不登校児への支援に当たっているのか現状を見取る。適応指導教室と学校とが連携して不登校児の支援をしていくためには、どのような手だてを工夫していったら良いのかを、「不登校児への働きかけ」、「情報連携の意義」、「効率的な情報連携の在り方」に視点を当て、観察し分析する。

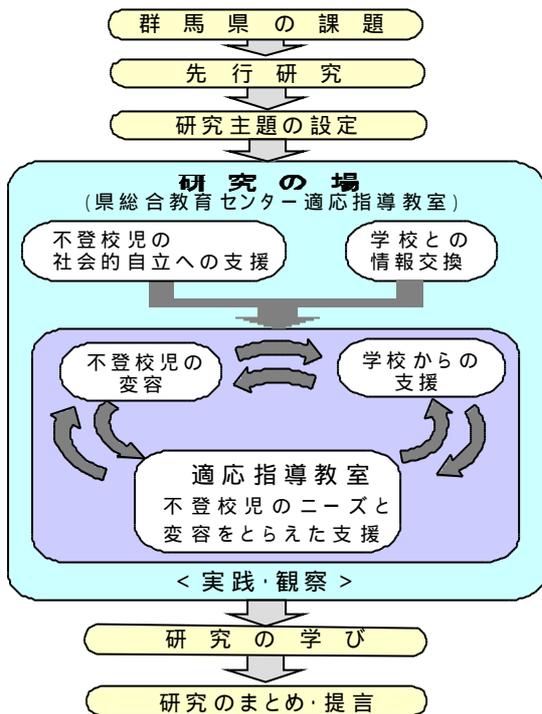
適応指導教室と学校との、効率的な連絡の取り方や情報交換の手だてを明らかにし、相乗効果をもたらす不登校児への連携した支援の在り方を考察する。このことは、不登校児の学校復帰を促す、適応指導教室と学校との連携した支援の在り方の工夫につながると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

適応指導教室と学校とが連携して、不登校児の学校復帰への相乗効果を生む支援をするためには、どのような手だてをしたら良いかを、「不登校児への働きかけ」、「情報連携の意義」、「効率的な情報連携の在り方」から分析し、明らかにする。

研究の方法

図1 研究の流れ



県総合教育センター内の適応指導教室において参与観察法により、不登校児への支援の在り方や、より効果的な学校との連携の在り方を明らかにする。参与観察法とは、調査者が調査対象の集団に入り、その一員として振る舞いながら、データを収集する方法である。

研究の内容

1 適応指導教室での不登校児への働きかけ

(1) 適応指導教室とは

適応指導教室は、不登校の児童生徒に対して、県や市町村教育委員会が設置した、学校生活への復帰を支援する施設であり、正式名称は「教育支援センター」である。

群馬県内には、市町村の適応指導教室が25箇所と、県の適応指導教室が群馬県総合教育センター内にある。適応指導教室への入級手続きは、保護者から学校長を通して行われる。図2に適応指導教室の所在地（平成17年4月現在）を示した。図中

図2 適応指導教室



の は市町村の適応指導教室を表し、 は県の適応指導教室を表している。

の は市町村の適応指導教室を表し、 は県の適応指導教室を表している。

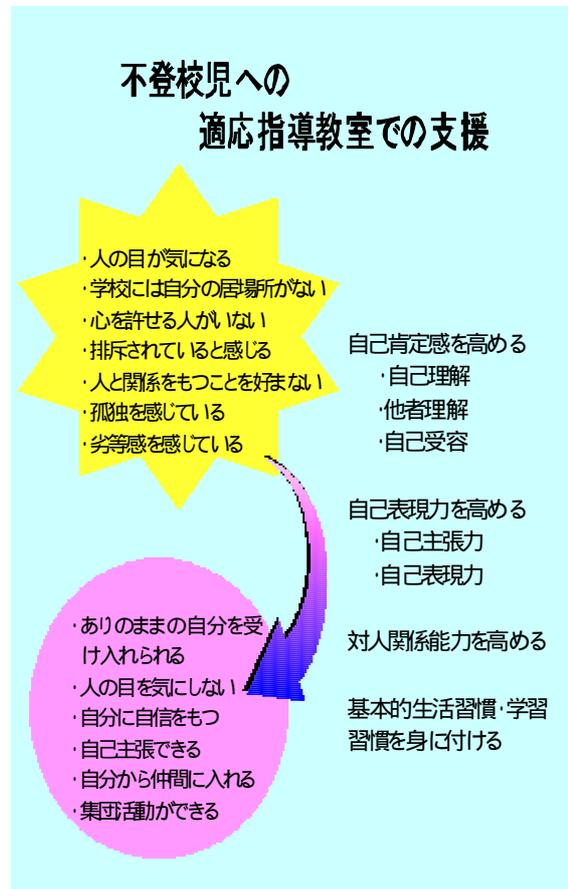
県総合教育センターの適応指導教室では、学校と連絡を取り合いながら、通級している児童生徒に、適応指導と教育相談（保護者にも平行して教育相談を行う）を行っている。また、学校では、適応指導教室からの情報を参考に、児童生徒の関心や要望に応じた支援を行っている。

(2) 適応指導教室での支援の見取り

適応指導教室では、様々な不安や緊張感を抱えている不登校児の不安要因を軽減し、学校復帰への勇気をもたせ、社会的に自立できることを目指して、自己肯定感や対人関係能力を高める支援をしている（図3参照）。

適応指導教室での活動は、各自が「一日の活動計画」を立てることから始まる。この自分で決めた課題を達成させる活動を通して、自主性・自律性・社会性の育成を支援している。午前中は学習活動や読書、パソコンなど個人的な活動を、午後は運動やゲーム、調理実習など集団活動をしている。また、他の適応指導教室と合同で、合同体験活動（キャンプ）も行っている。

図3 適応指導教室での個への支援



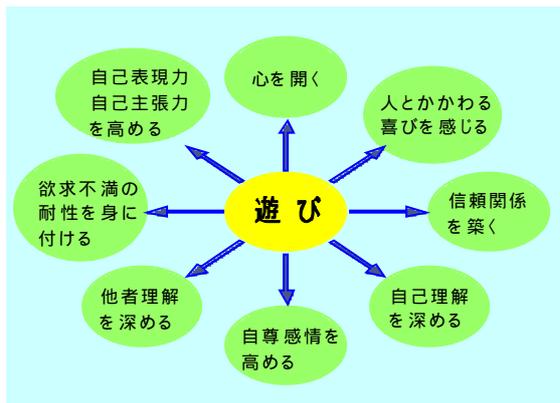
(3) 学校復帰のための「エクササイズ」

ア 治療的機能としての【遊び】の見取り

「相談室では、どうして遊んでばかりいるのだろうか」と疑問をもつ人もいるであろう。しかし、この「遊び」が、不登校児の社会的自立への大変重要な支援であることが分かった。

「遊戯療法」という心理療法に示されるように、子どもにとっては「遊び」自体が治療的機能をもっている。また、子どもは遊具や遊びを媒介として、支援者や子ども同士の自然なコミュニケーションを成立させる。つまり、遊びを通して心理的緊張を解放し、好ましい人間関係をつくり、信頼感や自己肯定感、社会性を身に付けていく。また、遊びの中に、子どもの人間関係を形成する能力・欲求・認知や思考の様式などについて観察することができる。適応指導教室で見取った、「遊び」のもつ治療的機能を図4にまとめた。

図4 「遊び」の治療的機能

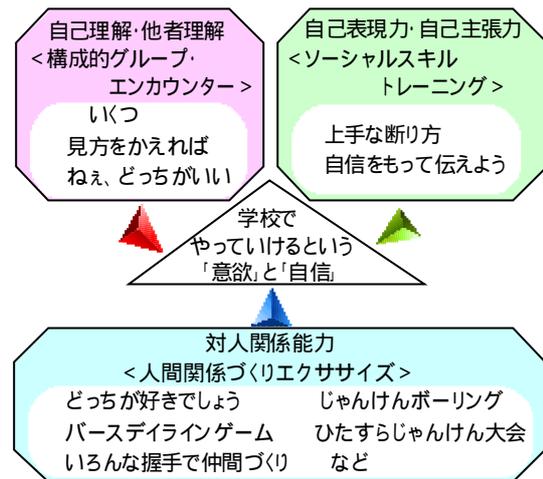


イ 学校復帰のためのエクササイズの実施

不登校児の学校復帰を促すためには、人とかかわることの楽しさや喜びをもたせ、「自分も、学校へ行って友達と一緒に生活できる」という自信や意欲を高める支援の必要性を参与観察から見取った。そのためには、「対人関係能力」、「自己理解・他者理解」、「自己表現力・自己主張力」を育成することが重要であると考えた。

遊びはとても有効な手段である。しかし、真剣に自己と対面したり、相手の内面を深く理解するには限界がある。また、不登校児には、意図的に自己表現のトレーニングをする必要性も感じた。そこで、じっくりと自分の内面を見つめたり、他者を理解したりするエクササイズや、ソーシャルスキルトレーニングの活用が有効であると考え、エクササイズを実施した(図5参照)。

図5 エクササイズの実践構想図



【対人関係能力を高める】
人と触れ合うことの良さや、集団でいることの楽しさを味わわせることで、人と関係をもつことへの不安感や緊張感を軽減させる。

【自己理解・他者理解を深める】
自分自身をよく知ることで、ありのままの自分を受け入れられるようにする。また、他人を良く知ることで、自分と異なる考え方や行動をとる他人を認められるようにする。

【自己表現力・自己主張力を高める】
相手とのより良い関係を築くためにも、自分を大切にするためにも、自分の気持ち・考え・意見・希望などを率直に、しかも適切な方法で表現できるようにする。

不登校児は大変繊細である。そのため、エクササイズの指導計画の作成では、不登校児の興味・関心や精神面の状態など、実態把握が重要であり、以下の4つの項目に配慮した。

- 身に付けさせたい資質の重点化
- 直面させることのできる内容のレベル
- 楽しく意欲的に取り組める活動内容
- 抵抗なく自己表現できるような
振り返り用紙の工夫

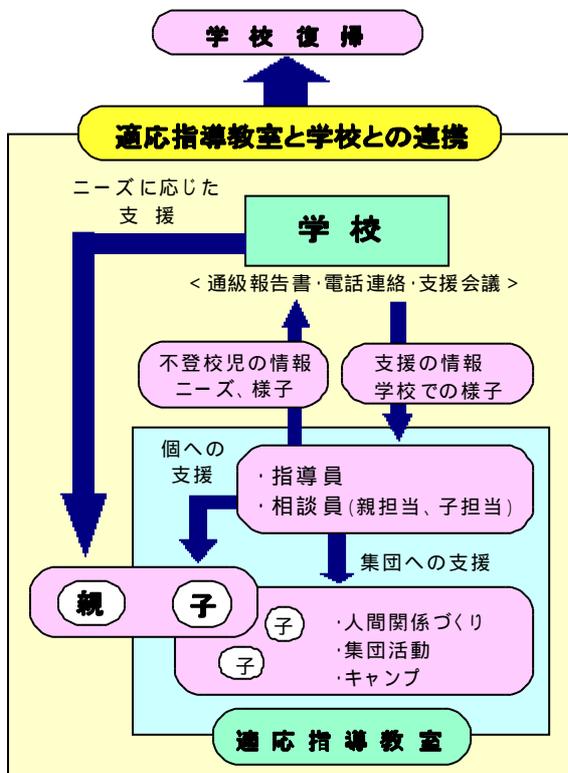
エクササイズ実施後、自分から人に話しかけていく姿や、人の意見を気にしていた子が、自分の気持ちや考えを言葉で表現する姿が見られるようになった。エクササイズを通して、不登校児の自己肯定感や、人とかかわることへの自信、自己表現する勇気をはぐくむことができたと思う。

2 情報連携の意義

適応指導教室では、学校と情報交換をしていた。適応指導教室からは、不登校児の要望や様子を伝え、学校からは、不登校児への支援情報や不登校児の様子などを伝えていた。情報を共有することで、学校はタイミング良く不登校児の要望にあった支援を行い、適応指導教室では、不登校児が学校からの支援を受け入れられるような支援を行っていた。このような情報連携が、不登校児に再登校への勇気と意志をはぐくみ、学校復帰を促すためには欠かせないことが分かった。

図6は、不登校児の学校復帰へ向けて、情報連携した支援の流れをまとめたものである。

図6 学校復帰へ向けた支援の流れ



(1) 不登校児に対する支援の見取り

適応指導教室に通級している児童生徒に対する、適応指導教室と学校の支援内容を、観察し分析した。表1は、その分析結果をまとめたものである。その結果、適応指導教室は不登校児とのかかわりを通して、精神的な安定や学校復帰への意欲付けを図る支援をしている。学校は受け入れ態勢を整え、必要な情報の提供をし、登校を促す支援をしている。すなわち、適応指導教室と学校とでは、それぞれの立場から、不登校児に対しての支援の在り方が異なることが分かった。

この双方の支援がうまく連携されることにより、学校からの「学校において。歓迎するよ」というメッセージが、学校に引く力となり、また、適応指導教室の精神的な支援が、学校へと押し出す力となって、不登校児を再登校へと動かすのではないかと考える。

表1 学校と適応指導教室における支援

| | |
|-----|---|
| 学校 | <p>学校(学級)風土を良くし、受け入れ態勢を整える。</p> <p>生徒や親と連絡を取り合い、ニーズに応えた支援により、信頼関係を築く。</p> <p>適応指導教室と連携し、不登校児の進路指導を進める。</p> <p>登校する機会を提供する。</p> <p>適応指導教室と情報交換し、登校したときの対応(場所・人・時間・内容)を吟味し、職員がチームを組んで支援に当たれるようにする。</p> <p>生徒の状態や状況を全職員が共通理解し、支援に当たれるようにする。</p> |
| 相談員 | <p>不登校児への心理的支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不登校児の気持ちに寄り添い、ストレスを軽減できるよう支援する。 ・共感的な理解に立ちつつ、自己理解や自己指導能力を高め、不登校児の自立を支援する。 <p>保護者への心理的支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の気持ちに寄り添い、心の安定を支援する。 <p>不登校児・保護者のニーズの把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒や保護者の支援に必要な情報を得る。 ・学校と適応指導教室の支援者へ、プライベートに配慮しながら、支援に必要な情報を提供する。 |
| 指導員 | <p>自主性・自律性・社会性の育成を支援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己肯定感を高める支援 ・自己理解・他者理解を促す支援 ・対人関係能力を高める支援 <p>学校以外の居場所として支援する。</p> <p>再出発への準備の支援をする。</p> <p>(出席日数確保、学習支援)</p> <p>不登校児と学校とをつなげる資源を見付ける。</p> <p>学校に興味・関心をもてるような働きかけをする。</p> <p>学校からの支援を受けての、本人の気持ちや変容などの情報を、会話や態度からキャッチし、学校と連絡を取りながら連携して支援する。</p> |

(2) 見取りから考察した情報連携の意義

ア 必要とする情報

学校は、不登校児の様子や要望を把握しにくい。そこで、学校は適応指導教室からの情報が必要である。また、適応指導教室は、不登校児の気持ちを学校に向けた支援をするためには、学校からの情報が必要であることが分かった。

<学校が必要としている情報>

適応指導教室での児童生徒の様子
児童生徒や保護者の変容
児童生徒が学校に希望する支援内容・方法
保護者、児童生徒に連絡をするタイミング

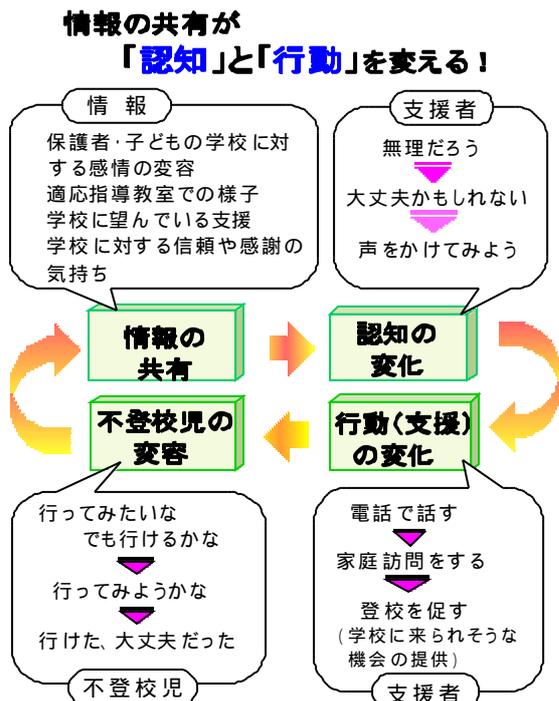
<適応指導教室が必要とする情報>

学校からの児童生徒、保護者への働きかけ
学校の支援に対する児童生徒の反応
学校へ行ったときの、児童生徒の様子

イ 情報共有の円環的作用

情報の共有が、支援者の不登校児に対する認知に変化を及ぼし、新たな支援へと踏み出させた。その支援を受けて不登校児は変容を見せた。さらにその情報を受けて、新たな認知・支援へと円環的に作用し、不登校児が学校復帰へ向かって変容していくことが分かった。図7は、考察した情報共有の円環的な作用を示したものである。

図7 情報共有の円環的作用



ウ 適応指導教室での登校へ向けた支援事例
学校復帰への兆候を逃さずつかむ

不登校児が進路への関心を示したときに学校から進路指導を受けるように促した。また、不登校児が進路指導を通して、学校と関係がもてるように情報連携をしていた。学校へ行くための目的を見付ける

不登校児が、学校へ行って支援を受けたいと思うような目的を見付け、不登校児の希望や関心事を学校へ伝えていた。

登校への努力を認め賞賛する

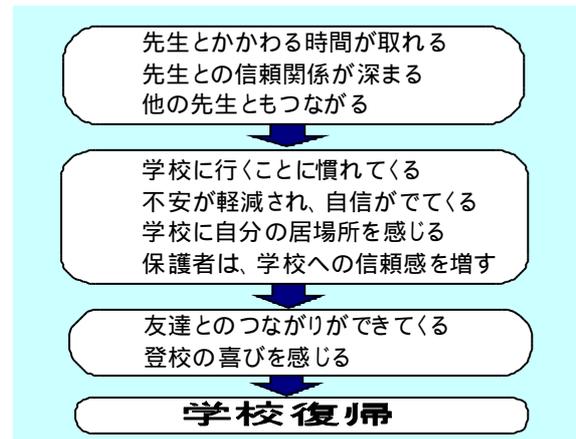
不登校児が登校できたときに、その努力を認め賞賛し、登校への自信と喜びを感じられるような支援をしていた。

以上のように、不登校児の学校復帰への兆候を見逃さず、不登校児と学校とがつながることのできる目的を見付けることが大きなポイントであることが分かった。また、学校と情報連携しながら、不登校児と学校との心理的距離を近づけるような働きかけが、不登校児と学校とのつながりを強くしていく上で有効であったと考える。

エ 学校での登校へ向けた支援事例

学校は情報連携で得た情報をもとに、テストや補習など、不登校児を学校へ誘う情報を提供した。また、不登校児が登校できた機会を有効活用し、登校への自信と価値を見いださせる支援を行った。その結果、不登校児は学校へ行く度に、担任と、他の先生と、そして友達と、人とのつながりが少しずつ広がっていった。学校とかかわる機会や時間が増えることで、保護者も学校に感謝し信頼感を増していった。この、学校からの登校の喜びを感じさせる支援により、不登校児の学校復帰への意欲を高められたと考える(図8参照)。

図8 学校の支援による不登校児の変容



3 効率的な情報連携の在り方

(1) 情報連携の方法と課題の見取り

県総合教育センターの適応指導教室では、通級報告書・支援会議・電話連絡で情報連携を行っている。それぞれの方法での課題を分析した。

ア 通級報告書

適応指導教室では、通級児童生徒の出席状況や生活の様子などを、書面で学校に報告している。出席日数の報告や事務連絡など、保存ができ、正確な記録の報告などには、大変適している。

課題

通級報告書では、情報が適応指導教室からの一方的な情報であり、支援のタイミングを逃してしまいがちな面がある。

書面では、微妙な児童生徒の様子や気持ちなどを的確に表現することは難しく、適応指導教室からの思いを学校に伝えきれない面がある。

イ 支援会議

適応指導教室と学校の支援者が、直接会って、不登校児の支援を考える会議である。

< 支援会議が必要な時期 >

年度始め、適応指導教室の入級時
支援方針の話合いと共に、連携をする支援者同士の人間関係づくりが重要である。
不登校児に登校意識が見られた時
登校できるよう、また、登校した時の環境づくりなどを話し合い、連携して支援に当たれるようにする。

新たな支援の方針を見いだしたい時
お互いに情報を出し合い、より良い支援の内容や方法について話し合う。

< 支援会議の会場 >

適応指導教室で行う場合

- ・適応指導教室の指導者だけでなく、親担当や子担当の相談員とも直接話し合える。
- ・不登校児が支援を受けている適応指導教室の生活環境が分かる。

学校で行う場合

- ・学校側の支援者の時間的な負担が少ない。
- ・学校側での支援にかかわっている複数の支援者と適応指導教室の指導者が話し合える。

直接会って話し合うことは、連絡を取り合う者同士の人間関係を築いたり、不登校児の様子を理解し、これからの支援の在り方を一緒に考えてい

く方法として、一番有効なものである。

課題

直接会って支援会議をする時間を作ることが難しい。

支援会議を待って、不登校児の意識の変容や、学校に希望する支援の情報を伝えたのでは、支援のタイミングを逃してしまう。

ウ 電話での情報交換

不定期に、適応指導教室と学校とが連絡を取る必要が生じた時に、電話で情報交換を取り合う方法である。

< 迅速性を必要とする情報 >

緊急性のある不登校児の要望の連絡
不登校児や保護者の意識の変容の連絡
不登校児の登校に関する動きがある時の学校との迅速かつ綿密な情報交換
タイミング良い情報交換

電話での連絡は、短時間で様々な情報を連絡できるため、一番手軽な連絡手段である。また、一番迅速に、臨機応変に対応できる連絡手段である。

課題

相手の表情が見えないので、正確に思いや情報を伝えることが難しい。

電話をかけた時や、電話がかかってきた時に、電話口に出られないことが良くある。

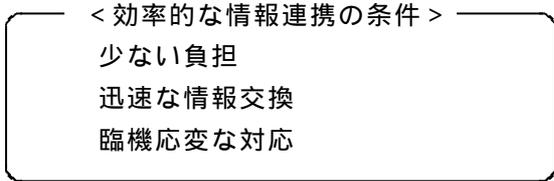
図9 情報連携の課題

< 支援者の思いや願い >



(2) 効率的な情報連携の在り方の考察

適応指導教室と学校とが連携していくためには、情報交換の効率化が、一番の課題であることが分かった。



効率性から情報連携を考察すると、電話連絡が一番有効であると考えます。負担が少なく迅速、かつ臨機応変に対応できる電話連絡に、正確な意志の疎通が図れる支援会議の要素を加味すれば、効率的な情報連携ができると考える（図10参照）。

スムーズな意志の疎通は、お互いの人間関係に影響されると考える。つまり、不登校児が適応指導教室に入級した初期に支援会議をもち、共通認識での支援目標を立てると共に、お互いの人間関係を構築する。また、電話連絡が取りやすい時間帯を相談しておく。これらの手だてにより、電話連絡が「連絡が取りやすく、正確に意志の疎通が図れる」理想的な情報連携手段となると考える。

適応指導教室と学校との密接な情報連携が必要

な時にできるよう、お互いを結ぶ太いパイプ（人間関係）をつくっておくことが重要だと考える。

適応指導教室と学校との、効率的な情報連携による支援の見取りから考察した、不登校児の変容の様子を、図11にまとめた。

図10 効率的な情報連携

＜負担が少なく、迅速、臨機応変な対応＞
電話連絡の活性化 **を图ろう!**

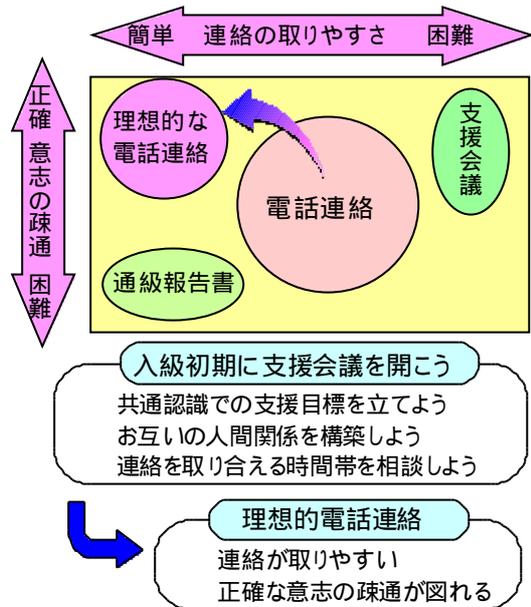
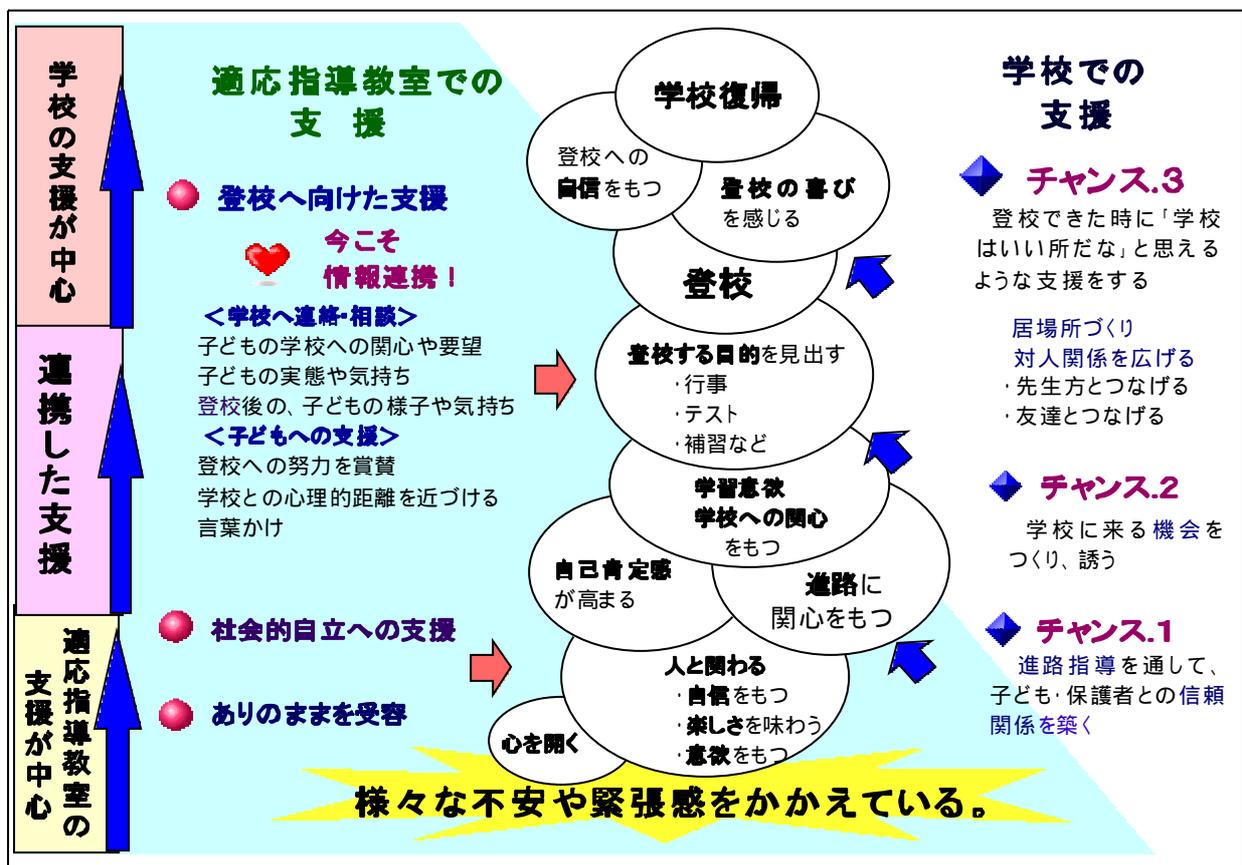


図11 連携した支援と不登校児の変容



(3) チャンスを生かした情報連携

自己肯定感や対人関係能力などが高まってきた不登校児の学校復帰に向けた支援には、3つのチャンスがあることが分かった（図11参照）。

- 学校へ「向く」チャンス
- 学校へ「動く」チャンス
- 学校と「つながる」チャンス

学校へ「向く」チャンス

適応指導教室で、自己肯定感が高まってくると、不登校児は自分の将来や進路に関心をもち始めた。そこで、学校が進路指導を行うという方針で情報連携を進めた。適応指導教室は不登校児に、進路の情報を多くもつ学校から、最新の情報を得るように促した。学校はタイミング良く、要望にあった進路指導を行い、不登校児との信頼関係を強くしていった。その結果、不登校児の気持ちが学校へと向いた。

学校へ「動く」チャンス

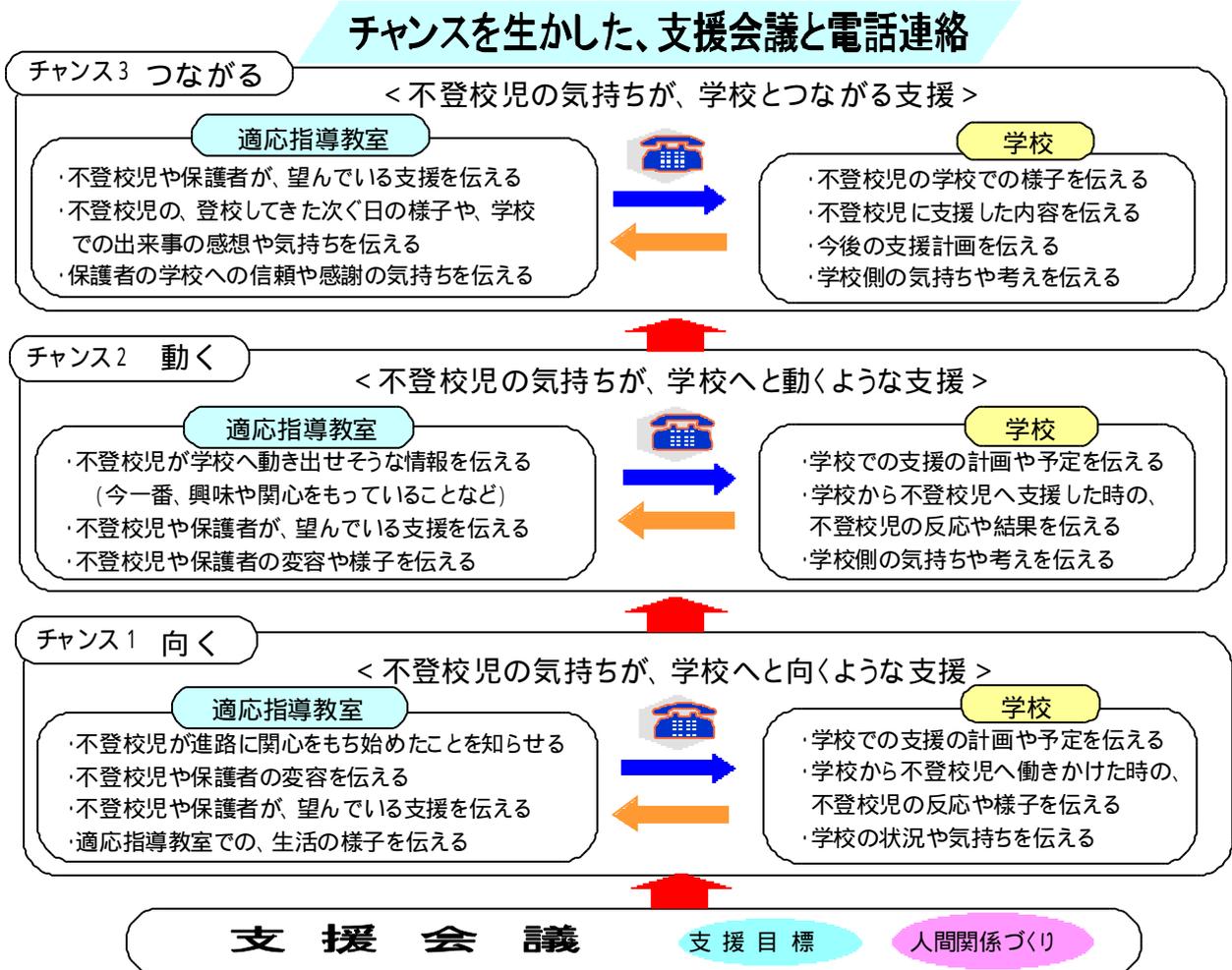
不登校児の気持ちが学校へ向けば、次は学校へと「動く」チャンスである。情報連携により、不登校児の気持ちを登校へと動かす支援は何かを考える。そして、学校は、不登校児が登校してみようと思う機会をつくり、登校を促す。

学校と「つながる」チャンス

登校できた時が、一番大きなチャンスと考える。短い時間でも、登校の喜びや安心感が得られるよう支援をする。学校での居場所づくりや対人関係を広げる支援と、登校への自信をもたせる支援により、不登校児の気持ちが学校と強くつながっていくと考える。

チャンスに気付いたら、すぐに支援会議を開いて支援目標と人間関係を築き、電話連絡で密に情報連携しながら支援に当たることが必要であるとする。この学校復帰へのチャンスを生かした、支援会議と電話連絡を活用した情報連携の在り方を、図12にまとめた。

図12 チャンスを生かした情報連携



研究のまとめと今後の課題

1 まとめ

研究の結果、不登校児の学校復帰を促す適応指導教室と学校との連携した支援の在り方として、次のような手だてが分かったので提言する。

相談室では「遊び」を大切に

不登校児の社会的自立や学校復帰には、人とかかわる喜びや楽しさを感じさせることが最重要である。遊びを通してコミュニケーションを図り、自己肯定感を高める支援が必要である。

情報の共有が、認知と行動を変える

不登校児の変容の情報が、新たな支援へと踏み込ませる。その新たな支援が、不登校児を学校復帰へと一歩踏み出させる。積極的に連絡を取ることが大切である。

電話連絡で、効率的な情報交換

手だて1：支援者相互の人間関係づくり
手だて2：共通認識の支援目標
手だて3：連絡を取りやすい時間帯の確認

学校復帰への支援の共通認識と、気軽に連絡を取り合える関係が、電話連絡を活性化させる。活性化した電話連絡が、不登校児の学校復帰に相乗効果を生む連携支援を実現させる。

学校復帰支援の3つのチャンス

チャンス1：学校へ「向く」
チャンス2：学校へ「動く」
チャンス3：学校と「つながる」

不登校児の学校復帰への支援には、3つのチャンスがある。このチャンスの兆しを適応指導教室が逃さずつかみ、学校と情報交換を密にして、不登校児を学校へ「向く」よう、「動く」よう、「つながる」よう連携して支援をしていくことが、学校復帰には有効である。

進路への関心は、学校復帰への兆候

不登校児の進路への関心は、学校復帰へのチャンスである。適応指導教室と学校との連携支援が必要不可欠となる時である。また、連携支援が不登校児の変容に、一番相乗効果を生む時である。電話連絡を活性化させ、迅速で臨機応変な連携支援をすることが大切である。

適応指導教室は情報管理センター

適応指導教室は、不登校児の学校復帰への兆候を見逃さず、迅速に学校と連絡を取らなければならない。また、学校での支援効果を、学校にフィードバックすることも必要である。つまり、適応指導教室は不登校児に関する情報を、積極的に収集・発信していく情報管理センターとしての機能が要求される。

2 今後の課題

今後の課題として、以下のことがあげられる。

適応指導教室と学校との連携の在り方を、学校で相談室登校をしている児童生徒への支援や相談室担当者と学級担任との連携した支援の在り方にも応用できるよう研究していきたい。

効率的な情報連携に関しては、効果的な支援会議のもち方や、電話連絡の在り方について、さらに研究していきたい。

不登校児の学校復帰へ向けた情報連携には、どのような情報が必要であり有効であるのか、情報の内容を分析する必要性を感じる。適応指導教室と学校とが、どのように連携して支援していくことが、不登校児の学校復帰に有効なのか、連携の在り方をさらに深めていきたい。

主な参考文献

- ・高野清純著 『講座サイコセラピー第6巻プレイセラピー』日本文化科学社(1988)
- ・國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集』図書文化社(2005)
- ・國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる小学校編』図書文化社(2005)
- ・國分康孝監修 『ソーシャルスキル教育でこどもが変わる 小学校』図書文化社(2002)
- ・園田雅代・中釜洋子著 『子どものためのアサーション自己表現グループワーク』日本・精神技術研究所(2005)
- ・『実践ワークブック不登校問題課題解決支援資料 改訂版』群馬県総合教育センター(2005)
- ・教育技術MOOK 『人間関係を豊かにする授業実践プラン50』小学館(2003)
- ・図2は国土地理院発行の数値地図25000(行政界・海岸線)から複製

(担当指導主事 住谷 孝明)